病院図書館　2006；26(1)：3-6

特集　図書館づくりとレイアウト

これからの病院図書館のプランニング

まずスタッフのくつろぎと交流の場に、そして院内のオアシスに

平湯 文夫

Ⅰ．はじめに

私は、長く図書館学を教え、学生のさまざまなテーマの卒業研究の相手もしてきましたから、病院図書館関係の文献にも多少は目を通し、実際に見学もしてきました。しかし、この稿を書くにあたり、あらためて最近の文献に目を通してみて、患者、家族へのサービスが盛んになってきたことと文献が多くなったことに驚きました。そして、病院図書館を訪ねてみて、その活動と施設面との隔たりの大きさも感じました。

また私は、図書館学を教えるかたわら、学校図書館を生きかえらせることと、公共図書館づくりの運動にもかかわりつづけてきました。そして、施設面から、親しみやすく、また機能的にすることによって利用を広げることが大きく欠けていると思いつづけて、リタイア後は特にこのことに力を入れています。

従って、病院図書館のプロであるみなさんに病院図書館について説くのは気が引けますが、病院図書館計画のプロがおられるとも思われませんので、私の思うところを２点にしぼって率直に述べさせていただくことにしました。

一つめは、私の持論ですが、図書館は館種を越えて、まず施設面から親しみやすいものにして利用を広げていくことの大切さと、それにはどうすればよいかということ。

二つめは、思いきって、病院図書館そのものの立地を患者と家族が利用しやすいところに近づけて開放することの提案です。

紙数の制約があることやカラー写真でないと表わしにくいことなどから、ごく概略しか述べられないことをあらかじめおことわりしておきます。

前者について関心をもたれた方は、「情報の科学と技術」誌（52巻１号）の拙文をごらんください。「FAX：095-814-0187 平湯宛」にご請求いただけば抜刷りを無料でお送りします。

さらに関心をもたれた方は、有料で恐縮ですが、カラー写真をたくさん使った「図書館を生きかえらせる」シリーズをどうぞ。シリーズ①

学校図書館も変わりつつあります。入口は人を呼び迎えるように。室内は楽しく。

ひらゆ　ふみお：図書館づくりと子どもの本の研究所　主宰

「カラーパネル篇」(送料込1,000円)、シリーズ③「図書館家具絵物語篇」(送料込800円)

Ⅱ．すべての図書館にとってまず大切なことは利用をふやすことでしょう

すべての館種に、なによりまず大切なことは、その図書館がだれにでも親しまれてよく利用されるようにすることだというのが、ずっと私の信念となっています。このことは、デューイであれランガナタンであれ、まさに、その依って立つ根底としたものであったはずなのに、図書館人たちは、デューイを十進分類法の考案者だけに矮小化してしまい、ランガナタンに至っては、日頃思い出すことすらめったにないものにしているように思えてなりません。

沖縄県立図書館の初代館長であり、沖縄学の祖といわれる伊波普猶(いはふゆう)氏は、「知識に隔てられた85%の人々にこそ図書館は開かれなければならない」といいましたが、偉大な図書館人たちの思いはみな同じだと思います。

それなのに、現実に書かれる図書館学の著作にも論文にも、そして図書館員たちの毎日の仕事の営みにも、その根底にこのいちばん大切なことが見えてこないことが少なくありません。

病院図書館においても、すべての医療従事者が日常的に利用できている状況からほど遠いところも少なくないのではないでしょうか。

ある程度の規模の病院であれば、医学専門書に専門雑誌などの資料とコンピューターはひととおり整っていて、図書館員も一人ぐらいはいるはずです。しかし、そこが、楽しく、親しみやすく、アメニティもゆきとどいたところになるのはまだまだのところが多いと思いました。

Ⅲ．では、病院図書館にどんな使われようをイメージしているのか

忙しい毎日だからこそ、心がけてブレイクをつくってでも、職員がだれでもくつろぎにやってくるようなところをつくることだと思います。そこは、医局にも、ナースステーションにも、カンファレンスルームにもない、ここちよい、アメニティの空間としてつくりたい。多忙、緊張の毎日の中に、人間をとりもどすところとして、それは、街にも学校にも大学にも職場にも大切なところだと思うのです。

週刊誌やベストセラーなどもほしい。そして、だれもが呼び寄せられるように、三々五々、ここにやってきて、いつも幾人かはそこにいるという状態から、なにかが始まると思うのです。医師同士、医師と看護師、検査技師、薬剤師…それら同士の、また図書館員を介して、医局やナースステーションでは出ない話も始まって、そこに新しい人間関係もできて、情報交換も始まる中から、新しい医療も生まれていくように思われるのですが…。

そんな中から、医学、薬学や看護学などの専門書や専門雑誌の利用も、そして情報検索も広がり深まっていくのではないでしょうか。街の図書館も、学校の図書館も、大学の図書館も、図書館というところは本来すべてそういうはたらきをもっているものだと思います。ですから、冷たいメタリックグレーの書架に専門雑誌が並んでいるだけの殺風景なところは、早くそこから脱却していく方向をもちたいものです。

その具体的な方法については先にあげたものをご覧いただくとして、その気になれば、今日からでも予算なしでも始められます。院内や自宅で眠っているものを使ってでも、千円、1万円のポケットマネーからでも、まずとりかかることです。自分の仕事であり、職場なのですから。そこから10万、100万の予算もついて、ことは展開していくものです。

Ⅳ．そのような使われようを促す施設の改修は具体的にどうやればよいのか

まず、前頁の2枚の写真をご覧ください。学校図書館の写真で恐縮ですが、従来は教室と同じ不透明のスチール枠のドアだったものを、床まで透明なアール付きの木枠のドアに変えました。その中に右の写真のような楽しげな内部が

見えるようにするのです。人は、楽しくアメニティのないところにはやってきません。学校図書館を病院図書館に翻訳してご覧ください。

カラー写真でないと感じとっていただけないと思いますが、やさしい、あたたかい色あいの桜やパイン材の生地仕上げで、木のしっとりとした肌あいがしっかり生きるような塗装仕上げがしてあります。そのほか、材質は木や布で、色は暖色で、形はアールや斜めをとり入れます。既成の商品はどれもみんな、無機質で人をやさしい気持ちにしてくれません。

この玄関一つがどれだけ人を呼び迎えるか、右の写真の奥の丸テーブル一つが、ここに掛けた人たちの心をどう変えるか、ぜひいっしょに試みてみたいものです。

V．それはさらに、患者のためにも開かれていく方向をもつべきではないでしょうか

ここちよいアメニティの空間ができて、週刊誌やベストセラーも置かれ、図書館員もいる病院図書館ならば、さらに一歩進めて、患者と家族、さらには地域住民にも開放していく方向をもつべきではないでしょうか。

医学専門誌などがおかれたあたりは患者になじまなくても、体系化された基礎的な医学書などけっこう利用が多いと聞きます。店頭には市民のための健康、医療関係の本があふれているのですから、その中から良質の本を選んで提供する意味からも患者のための図書館は必要でしょう。このような態勢がととのってこそ、セカンドオピニオンもインフォームドコンセントも活かされるというものです。それは、医療関係の情報を得るというだけでなく、ビブリオセラピー（読書療法）のためにも、市民としての図書館利用にも必要なことです。公共図書館からの病院へのサービスも広がりを見せていますし、病院側にそれを受けとめる場所があり、人がいることは、大変ありがたいことですから、このことはぜひ進めたいものです。

Ⅵ．京都南病院、聖路加国際病院、市立豊中病院、関西労災病院の図書館などを訪ねて考えました

日本の病院図書館における最新の情況を知るために、いくつかの病院図書館を訪ねました。上の4館のように、目の覚めるようなところもある一方、専門書と専門雑誌とコンピューターと図書館員1人だけの、特にアメニティなどの配慮も認められず、本会への入会、購読などもなさそうで、患者、家族に開かれることなどもちろんなく、課題にすらあがっていそうにないところもありました。時折、医師がやってくるのを待っているだけ、といったらひどすぎるでしょうか。

そういったさまざまな病院図書館を見学させていただきながら、学校、公共、大学の図書館も、めざましい活動をしているところがわずかにあって、多くは旧態依然ですが、病院図書館もあるいは同じなのかもしれないと思いました。

まず、京都南病院は、街中の古い建物の中の狭い部屋を究極まで使いきって、日本の病院図書館を導いてきたことを、主の山室さんとともに物語って圧倒されるほどでした。20年以上も前に出た「患者と図書館」（菊池佑編著）の山室さんの報告が既に目の醒めるものでしたが、それからさらに20年余をしっかり歩んでこられたことを示していました。

聖路加国際病院、市立豊中病院、関西労災病院は、共に近年新築された、従来の病院のイメージをすっかり変えてしまうほんとにすてきな病院でした。そして、それぞれに、患者と家族へのサービスも精いっぱい配慮され、部屋も設けられていました。

しかし、3者共にりっぱな病院図書館が設けられ、複数の専任図書館員も配置されているのに、その部屋で患者と家族にもサービスすることは、建設計画の時点では入っていなかったようで、いずれも遠く離れたところでなされているのは残念に思えてなりませんでした。

Ⅶ. 病院図書館を外来や病棟に近づけて患者にも開放してはいかがでしょう

まず、「病院図書館は医局の近くに」という前提で建築の計画がなされているように思われますが、外来、病棟、検査部門、ナースステーションなどにも近づけることを最初の計画の段階で考えるべきではないでしょうか。部外者の率直な物言いで恐縮ですが、医局に近づけることは、患者、家族だけでなく、看護師などの他の病院スタッフからも遠ざけることにならないでしょうか。病院スタッフ全員が使いやすくすることはまず大切なことでしょう。

次に病院図書館が、患者や家族の利用しやすいところに設けられて開放されることになったら、医師の相談もうけやすくなり、資料も豊富になります。せっかくのプロの司書が、常時、直接サービスにあたることができます。病気のことにも資料情報にも無知な患者や家族にこそプロの司書は必要でしょう。もちろんボランティアの協力も大切ですが、それも、プロの司書のコーディネートがあってこそ十分活かされるものでしょう。

インフォームドコンセント、セカンドオピニオン…と、医療の世界も大きく変わりつつあります。関係出版物も多く出され、関係論文、記事に至っては溢れんばかりで、「医学図書館」誌などにまで「患者図書サービス」の特集が組まれるときに、これから何十年も使いつづける建物の計画は、従来のままというのはなんとも残念な気がします。ハードは一度作ってしまうと変えるのは大変だからです。

医学の専門文献を患者と家族に公開することの是非の問題も、先進の病院図書館ではクリアされていると聞きます。

この、従来医局の近くにあった病院図書館を外来や病棟に近づけて、患者、家族にも開放することで、近年めざましい広がりをみせている患者サービスの抱えるさまざまな問題が、かなりすっきり解決してしまいそうに思えるのは、部外者の素人考えでしょうか。患者のための図書館に十分な広さを取ることも、プロの司書を置くこともこの方法でしかできないでしょう。

病院図書館の中に、病院スタッフのくつろぎと交流のスペースをつくるのはいいとして、そこに患者や家族まで入れて、医学専門書や専門雑誌まで開放したらという提案は、非常識と笑われるかもしれません。しかしそこは、医療と図書館のスタッフといっしょに知恵をしぼって計画にあたれば、奥には専門資料と検索、研究のためのスペースはしっかり確保して、むしろこれまでなかったことがおかしいくらいのすてきな部屋ができると思っています。そして、「病院機能評価」も住民の評判もあがるにちがいないと思うのです。

このことは、図書館のプロから、建築の計画にあたる病院の経営者と設計者になんとかしてしっかり伝えてほしいものです。

Ⅷ. 既存の病院図書館の改修や新築、改築、増築の計画をお手伝いしたいものです

図書館に限らず、施設づくりは、それぞれにちがうということと、ことばではもちろん、図面でも写真でも表現しようのないところがあり、また理解しにくいものです。そこで仮に、50万、100万の予算でも、入口を呼び迎えるようなものにもできるし、くつろぎと交流の場だってそれなりにすてきにできるものだという、“ビフォー・アフター”を、実際につくってご覧にいれたいものです。そして機会を与えていただけるなら、医師にも看護師にも患者にも十分利用しやすい、これまでなかったすてきなオアシスを病院の中につくる計画のお手伝いをしたいものです。実物が一つできたら、分かりやすくなって、とり入れるところもできていくでしょう。

最後になりましたが、古い友人で、医学部や病院の図書館にもいたことのある喜多芳明さんや、訪ねさせていただいた病院図書館の山室眞知子さんをはじめ司書の方々に、最新の情報や熱い思いをたくさん聞かせていただいたおかげで、この稿を書くことができました。